〔書　評〕

山本伸裕・碧海寿広編

『清沢満之と近代日本』

長谷川琢哉

一　はじめに

本書は山本伸裕・碧海寿広という、現在の清沢研究および近代仏教研究をリードする二人の研究者によって編集された最新の清沢満之研究論集である。まずは編者の言を借りて本書の趣旨を確認しておきたい。「はじめに」に示されているように、編者の一人である山本は、自著『「精神主義」は誰の思想か』（二〇一一年）において、『精神界』に掲載された清沢満之の署名入りの記事のいくつかに、暁烏敏を中心とした弟子たちの思想が混入していることを明らかにした。これにより、従来清沢思想の精華とみなされてきた「精神主義」には「大きな欠陥」が認められ、それゆえ清沢を今後研究していくためには、あらためて「「精神主義」以前からの一連の思想として掴み出し、評価し直すという作業」が必要になるという。本書は、編者たちのこうした問題関心によって導かれ、清沢満之をあるいは一人の思想家として、あるいは同時代の思潮との関わりの中で、多角的にとらえ直すことを目的としたものである。以下では、本書所収の諸論文の要点をまとめ、本書全体が描き出す（あるいは描き直す）清沢満之像がいかなるものであるのかを確認しよう。そしてその上で、本書に対する若干のコメントを付してみたい。

二　本書の内容

まずは「序章」として、末木文美士による「清沢満之研究の今――「近代仏教」を超えられるか？」と題した論考が掲載されている。末木は「清沢満之ブームと言ってよいくら

い」の活況を見せる近年の研究状況を振り返りつつ、それらの多くが「近代」という枠組みに清沢を押し込んでいるという問題点を指摘する。その上で末木は、「近代の終わった今日」において、なおも清沢思想に可能性を見出す試みとして、今村仁司の清沢研究に着目する。そしてそこから示唆を受けつつ、内観を通した「語りえないもの」、すなわち「絶対無限という他者」との出会いを論じた後期清沢の現代的意義を強調する。清沢満之は「近代を乗り越える思想として機能し得るか」、というのが末木の問題提起となっている。

次いで「清沢満之の思想」と題された第Ⅰ部には、「清沢の思想そのもの」に焦点を定めた三つの論考が収められている。

氣田雅子「清沢満之の宗教哲学――自力門・他力門の概念を手引に」では、宗教哲学を専門とする著者が、『宗教哲学骸骨』および「他力門哲学骸骨試稿」を中心に、清沢の宗教哲学を論じる。氣田は清沢の自力門哲学から他力門哲学への転回に着目し、後者においては、仏教の教えを受け取った上でそこから哲学的営為が立ち上がるという、宗教を軸とした「知の開け」が生じていることを確認する。そしてその限りで、清沢の他力門哲学の内に、西田幾多郎や西谷啓治とは異なるタイプの宗教哲学の可能性が見出されることとなる。

西本祐攝「親鸞と清沢満之」では、清沢がどのように親鸞の思想を学び、自身の思索を練り上げたのかということが、いくつかの資料から実証的に明らかにされている。大学四年次の「善悪」および「聖教抜粋」というノートからは、清沢が若い頃から独自の問題意識をもって『歎異抄』や『真宗聖典』を読み込んでいたこと。また「在床懺悔録」に見られる『教行信証』の読解には、すでに伝統教学とは異なる清沢独自の親鸞理解が現れていることなどが明らかにされている。

春近敬「教育者としての清沢満之」では、真宗大谷派の僧侶もしくは宗教哲学者として評価されることの多い清沢満之に対して、「教育者」としての側面から注目する。実際、大学卒業直後の哲学館講師から晩年の真宗大学学監に至るまで、清沢は一貫して教育にたずさわってきた。春近はそうした清沢の教育活動を彼自身の思想の根幹である「万物一体」論から解きほぐし、また同時代に盛んに受容されていたペスタロッチの教育思想との関わりなどから特徴づけている。

続く第Ⅱ部では「時代の中の清沢満之」として、同時代の思想状況・人間関係の中に清沢満之を位置づけ、さらにはその死後、清沢が後世に与えた影響などが考察されている。

まず星野靖二「清沢満之の「信」――同時代的視点から」では、清沢の「信仰」をめぐる議論を、彼自身が生きた明治

中期の思想状況から考察する。星野は中西牛朗や古河老川らの仏教改良論を参照しながら、清沢が「宗教」と「学問」の調和という論調から、「独断」としての「信」へと強調点を移していく様を描き出している。そして清沢の「信」は、古河の言う「懐疑時代」を経た後に、なおも近代的宗教者が選択しうる道筋のひとつであり、今日の「宗教」概念そのものにも影響を与えたものであると結論づけている。

長谷川徹「明治文学界の思想的交響圏――満之・漱石・子規の近代――」では、清沢満之および浩々洞の同人たちと正岡子規や夏目漱石らとの関わりが豊富な資料から辿られている。これにより、明治から大正にかけての知識人たちの間に、清沢の信仰や生き方が直接・間接に働きかけていることが炙り出されている。とりわけ漱石の周りの人間関係から、清沢が『こころ』のKのモデルとなっている可能性を示唆する点や、漱石晩年の境地である「則天去私」と清沢の「我信念」との関連性についてなど、興味深い指摘がなされている。

福島栄寿「蘇る清沢満之」では、清沢の死後、いかにして清沢満之という思想家のイメージが創出され、長らく影響を与えたのかが明らかにされる。福島が着目するのは、弟子たちが清沢の肖像画を礼拝の対象とし、「我信念」を聖典のように読誦するようになっていくプロセスである。各地で清沢を顕彰する臘扇会や臘扇忌が開かれ、それとともに清沢の評伝が編まれていった。こうして弟子たちによって清沢満之像は創出されてきたわけだが、清沢の実像に迫るためには、すでに出来上がった像に囚われないようにすることが重要であると福島は指摘する。

ジェフ・シュローダー「仏教思想の政治学――金子大榮の異安心事件をめぐって――」は、清沢の思想そのものではなく、清沢の思想が大谷派の「正当的教義」となっていく過程、あるいはその背後で働いていた「多層的な政治の諸相」に着目する。とりわけシュローダーが目を向けるのは、金子大榮の異安心事件である。著者によれば、異安心事件で問題となっていたのは、金子の浄土理論の内容よりも、むしろ伝統教学とは異なる方法論を用いた近代教学の影響力であったという。近代教学が伝統主義者との対立に打ち克ち、「個人の経験に基づく研究」、「代議制」、「自由討究」等の権威が認められるのにしたがって、教団内における清沢の正当性も定まることとなったという見解を著者は示している。

そして「終章」として、安冨信哉の「現代思想としての清沢満之――そのカレイドスコープの一視覚から」と題した論考が掲載される。安冨はこれまでの清沢研究をめぐる状況を振り返りつつ、清沢を「宗教的「個」の思想」として読み解

いてきた自身の立場を明らかにする。そしてその上で、「精神主義」において繰り返し問われてきた「倫理問題」についての問題提起を行う。すなわち精神主義が登場して以来、それは絶えず内に閉じこもる「羸弱思想」などと批判されてきた。しかし安冨によれば、清沢の精神主義は、宗教を倫理以上のものとしながらも、〈宗教から倫理へ〉という方向性を失ってはいなかったという。それは宗教的信念から現実社会へと向かう「着地の思想」であり、その意味で清沢思想は、個と公共との関わりを問いただす現代的な意義を有している、と安冨は結論づけている。

以上が本書の大まかな内容である。これにさらに附録として、編者山本による「清沢満之評伝――東本願寺と清沢満之」、および名和達宣による（主に真宗関係者に絞られた）詳細な「関連人物紹介」が付されている。

三　若干のコメント

本書を読んで何よりもまず感じさせられるのは、論者それぞれがもつ視点の多様性であろう。本書では清沢満之という人物を論じるにあたって、清沢自身のテキストに向き合うことに加え、同時代の思想状況や周囲の人間関係の中から多角的に考察するというアプローチがとられている。著者の一人である安冨の言を借りるならば、本書はさながら「カレイドスコープ」のように清沢の多様な面を描いているのである。これにより読者は、「近代日本」における清沢の影響力の大きさを様々な角度から知ることができる。

本書のこうしたアプローチが可能となったのは、「はじめに」で示されている通り、近年の研究によって揺るがされた清沢満之像をあらためて問い直すという編集方針によるものであるだろう。しかしおそらくは、それだけではない。本書の視点の多様性の背景には、近年の近代仏教研究の盛り上がりに活気づけられた、明治大正期の仏教思想史の掘り起こしがあると思われる。たとえば星野の論考では中西牛郎や新仏教徒同志会との同時代性から清沢を論じているが、この視点は、中西が主催していた雑誌『経世博議』に清沢が寄稿していたという事実からもたらされたものでもある。こうした新資料の発見には、星野らが進めた中西牛郎研究の進展が大きく関わっていることは言うまでもない。その他の論考においても、著者たちはこれまでは看過されてきた資料や人間関係に注目し、清沢を論じる足がかりとしている。こうした新たな観点からのアプローチは、近代仏教研究等の様々な最新の研究成果と結びつくことによって充実したものとなっていく。その意味で本書は、今後の清沢満之研究が進むべきひとつの

方向を、はっきりと示したものであるとも言えるであろう。

ただし本書の「カレイドスコープ」的な性格は、強みであると同時に、弱みともなっているという側面もあるかもしれない。つまり本書は清沢の多様な側面を描くことには成功しているが、しかし全体で見た場合、焦点となるような議論は十分に突き詰められていない印象を受ける。たとえば従来の清沢研究でも繰り返し問題となってきたものに「宗教」と「倫理」の関係をめぐる問題がある。本書ではこの問題について末木と安冨の論考の中で触れているが、両者共に問題提起にとどまっており、踏み込んだ議論を行っているわけではない。安冨の言う「着地の思想」にしても、その実際的有効性に関してはさらなる議論が必要であるし、そもそも明治期の「公（おおやけ）」と現代的な「公共性（Öffentlichkeit）」を接続するにはそれなりの手続きが必要である（ただし残念ながら、安冨氏は本書出版直後に急逝されたため、評者の問いかけに答えていただくことはできなくなってしまった）。また、「はじめに」で示された清沢満之と「精神主義」との関わりについても、本書の中で主題的に論じられているわけではない。そして末木が行った、清沢思想は「近代を乗り越える思想として機能し得るかどうか」という問題提起に対しては、『清沢満之と近代日本』と題された本書の他の著者たち、および編者たちはどのように答えるのだろうか。これらの点が十分に見えてこないのが気になった。

一読者として本書に対するいくつかの疑問点を示したが、しかしこうした疑問が生じるのも、本書の性格上止むを得ないことでもある。本書は従来考えられてこなかった様々な角度から清沢満之に迫ったものである。おそらくはここで示された清沢理解のための新たな視点が足がかりとなり、今後、従来の研究史で問われてきたような大きな諸問題についても、これまでとは違ったかたちで問い直されることになるだろう。本書の多様な議論を再び焦点化し、新たな清沢満之像を「創出」していくこと。それが、これからの清沢研究の大きな課題となることは間違いないだろう。

（二〇一六年十一月刊、法藏館、A5判、二八五頁、二八〇〇円＋税）

（親鸞仏教センター研究員　はせがわ　たくや）